神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	神奈川県下の石造宝塔について
著者	斉藤彦司
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告　第 6 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1974 年（昭和 49 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

神奈川県下の石造宝塔について

斎　藤　彦　司

Ⅰ　はじめに

神奈川県下に残る中世の石造建造物の中で宝塔は宝篋印塔や五輪塔に比べ，その造立例は少ない。そのため，個々の宝塔については代表的なものは紹介されているが，宝篋印塔や五輪塔のように，多くの研究は今までなされていない現状である。そこで私は県下に残る宝塔のうち，比較的形のそろっている数基の宝塔を紹介するとともに，その造立時期による形態の相違を中心に，2，3の考察を行なって見たい。

Ⅱ　神奈川県下の宝塔

前記のように，県下に残る宝塔は少なく，しかも，形のよくそろっている塔，銘文によって造立時期の明らかな塔は非常に少ない。

在銘塔としては，

1　鈴木氏　　嘉暦2年在銘宝塔（1327年）　鎌倉市佐介谷出土
2　上行寺　　文和2年在銘宝塔（1353年）　横浜市金沢区六浦町
3　阿弥陀寺　　至徳4年在銘宝塔（1387年）　箱根町塔ノ沢
4　鎌倉宮　　応永15年在銘宝塔（1408年）　鎌倉市二階堂
5　豊顕寺　　弘治3年在銘宝塔（1557年）　横浜市神奈川区三ツ沢西町
6　豊顕寺　　元亀3年在銘宝塔（1572年）　横浜市神奈川区三ツ沢西町
7　豊顕寺　　天正5年在銘宝塔（1577年）　横浜市神奈川区三ツ沢西町

があり，無銘塔と銘の磨滅が激しく読めないため年代不明の塔として，比較的形がそろっている塔としては，

1　別願寺　　無銘宝塔　　鎌倉市大町
2　大明寺　　年代不明宝塔　横須賀市衣笠栄町
3　妙純寺　　無銘宝塔　　厚木市金田

がある。

1.　鎌倉市　鈴木氏　嘉暦2年在銘宝塔（1327年）〔図―1・写真―2〕

この塔は鎌倉市佐介谷にあるやぐらから出土したもので，現在鎌倉国宝館に出陳されている。県下に残る在銘宝塔の中で，最も古い記年銘を持ち，完全にそろっている塔としても最も古い塔である。神奈川県立博物館でもこの塔の複製を作り展示している。この塔の総高は118.5cmである。

○基　礎

下部は方形で側面に輪郭を巻き中央に束を立てて一面を２区に分ける。区内には各々に格狭間を刻むが，形はややくずれ下方両脇のふくらみが小さい。

上部は反花で，一面に複弁の反花を４弁彫るが，両端の花弁は左右の面の花弁を兼ねているため，全体で12弁によって反花座を構成している。反花の上面には非常に低い方形の受座を造る。

○基　台

方形の側面は，基礎と同様輪郭と束によって一面を２区に分ける。基台の上面には低い円形の受座を造り塔身を置いている。

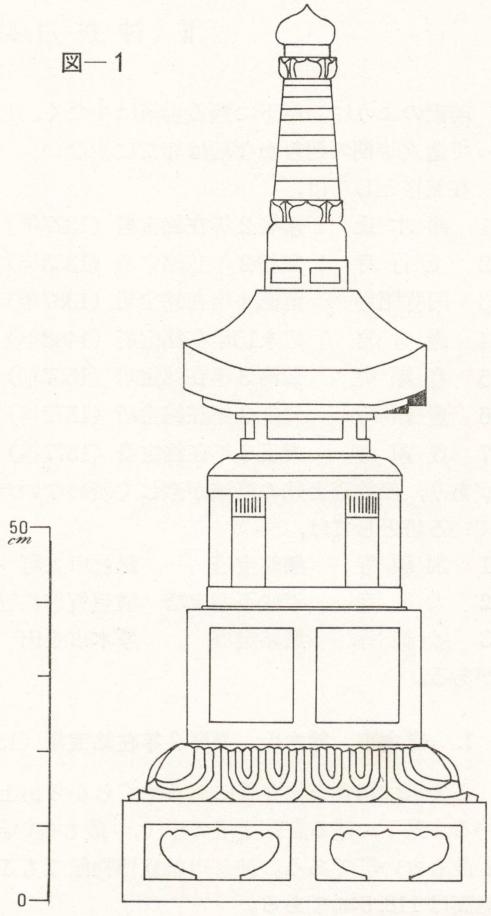
○塔　身

軸部は円筒で上部は粽形になる。肩部と下部には長押を巻き，上下の長押間には４本の柱を立てて４方に扉のあることを表現している。柱は正面から見える２本はやや太く，上部にたてに８本の刻線を入れて装厳している。扉内には，正面から，「南無多宝如来」南無妙法蓮華経」南無釈迦牟尼仏」右旨趣者相」当慈父三十」三廻之遠忌」為出離生死」頓

（表１）各部分の寸法

部　　分	寸法（単位ＣＭ）
総　　高	118.5
基　　礎	全高21.0
側　面	高13.5　横48.0
反　花	高7.5　横下46.0　上32.5
基　　台	全高18.5
側　面	高18.0　横31.0
受　座	高 0.5　径26.5
塔　　身	全高24.5
軸　部	高20.0　径25.5
首　部	高 4.5　径17.5
屋　　蓋	全高21.0
軒	中央厚4.5　横32.0
露　盤	高 3.5　横11.0
軒裏椎	高 1.0　横27.0
円　座	高 1.0　径18.5
相　　輪	全高33.5
伏　鉢	高 5.0　径10.5
下部請花	高 3.0　最大径 9.5
九　輪	高16.0　径下8.5　上6.5
上部請花	高 3.0　最大径8.0
宝　珠	高 6.5　最大径8.0

図―１



証并所」奉造立也乃」至法界衆」生平等利」益敬白」嘉暦二年」六月八日」孝子氏女敬白」の銘を刻む。軸の上部には低い饅頭型を造る。

首部は低い円筒で下部に長押を巻き4本の束を立てて4区に分けている。

○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ちあがり，両隅が反りあがる。軒裏には各1段の棰と円座を造る。棰は軒と同様両隅で反りあがっている。

屋蓋の上部には露盤を造り，側面は輪郭と束によって一面を2区に分けている。

○相　輪

下の部分から，伏鉢・請花・九輪・請花・宝珠によって構成される。

伏鉢は円筒で上部は粽形である。

下部の請花は下の方では外湾してふくらみ，上の方は垂直になっている。花弁は外側に4弁，内側に4弁の計8弁を彫刻する。

九輪は上部が細くなる円筒で，8本の刻線をめぐらして輪相を表現している。

上部の請花は下部にある請花とほぼ同じ形であるが，上の方でくびれている。

宝珠はいわゆる擬宝珠形で，下部は垂直に立ち上がり，その上部は丸味をもってひろがり，頂部はとがっている。

○参考文献

赤星　直忠　鎌倉市史　考古編
渋江　二郎　鎌倉の石塔　鎌倉国宝館図録　第十集

2.　横浜市　上行寺　文和2年在銘宝塔（1353年）〔図－2・写真－3〕

本堂の前の左側，墓地の入口にあり，周囲には石の垣根がとりまいている。上行寺ではこの塔を日荷上人の墓と伝えている。

相輪は欠失し，塔身の風化は激しい。塔の現高は127.5cmである。

○基　礎

下部は方形で側面を輪郭と束によって一面を2区に分ける。区内に格狭間は刻まない。上部は反花で，一面に複弁の反花を4弁彫るが，両端は左右の花弁を兼ねるため，全体で12弁で反花座を構成する。反花の上面には低い方形の受座を造る。

○基　台

方形の側面は基礎と同様輪郭と束によって一面を2区に分ける。左区内の中央に「文和癸巳四月廿二日敬白」と刻む。文和癸巳は2年（1353）である。基台の上面には円形の低い受座を造り塔身をのせている。

○塔　身

表面が他の部分と異なり非常に風化していて，もとの形は不明である。塔身だけ風化が激しいことは，他の部分と石質が異なるためであり，この塔身が造立当初のものであることには疑問が残る。

○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ちあがり，両隅が反りあがる。軒裏には各1

段の椎と円座を造る。椎は軒と同様両隅が反りあがっている。最上部には露盤を造り側面は輪郭と束によって一面を２区に分ける。

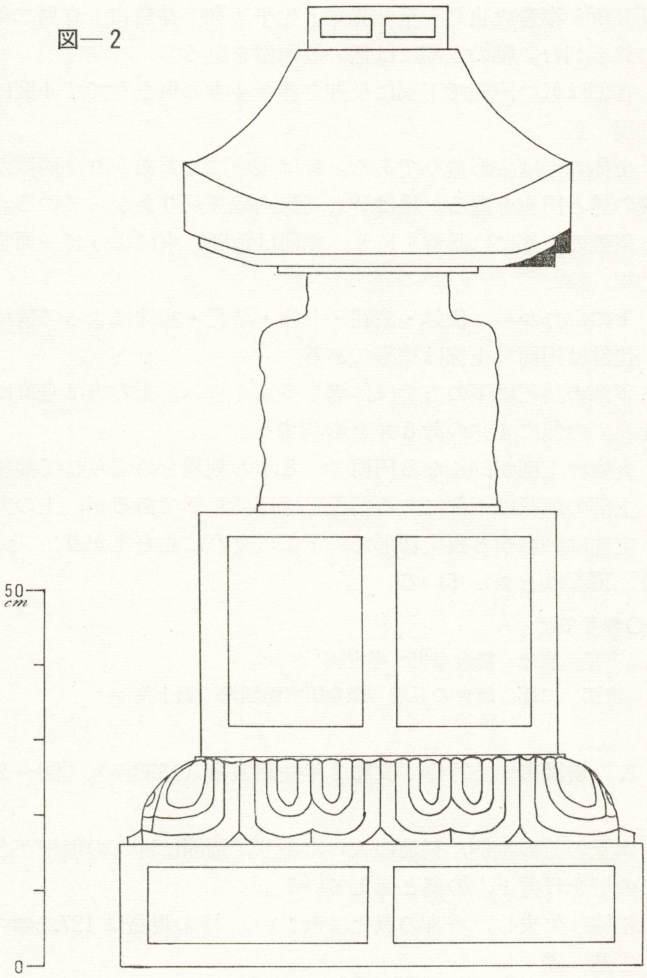
○相　輪

相輪は欠失している。

○参考文献

赤星　直忠　鎌倉市史
考古編

図―２



（表２）各部分の寸法

部　分	寸　法（単位ＣＭ）
総　高	現高127.5
基　礎	全高28.0
側　面	高16.5　横69.0
反　花	高11.5　横下67.0　上49.0
基　台	全高34.0
側　面	高33.0　横47.0
受　座	高 1.0　径32.0

部　分	寸　法（単位ＣＭ）
塔　身	現在高30.5 現在軸部径32.0
屋　蓋	全高35.0
軒	中央厚6.5　横51.0
露　盤	高 5.5　横18.5
軒裏椎	高 1.5　横47.0
円　座	高 1.0　径26.5

3.　箱根町　阿弥陀寺　至徳4年在銘宝塔（1387年）〔図―3・写真―4〕

阿弥陀寺は塔の峰の中腹にあり，この塔は本堂の裏手の谷の最奥部にあたるお穴稲荷と呼ばれる岩窟の入口にある。完全にそろっている塔で，総高は104.0㎝である。

○基　礎

下部は方形で側面を輪郭と束によって一面を2区に分ける。上部は反花で，一面に複弁の反花を4弁彫るが，両端は左右の花弁を兼ね，全体では12弁である。反花の上面には低い方形の受座を造る。

○基　台

方形の側面は基礎と同様輪郭と束によって一面を2区に分ける。区内には各2行ずつ「逆修塔各」衆等敬白」至徳丁卯」十一月日」の銘を刻む。至徳丁卯は4年（1387）である。基台の上面には側面が傾斜した円形の低い受座を造り塔身をのせている。

○塔　身

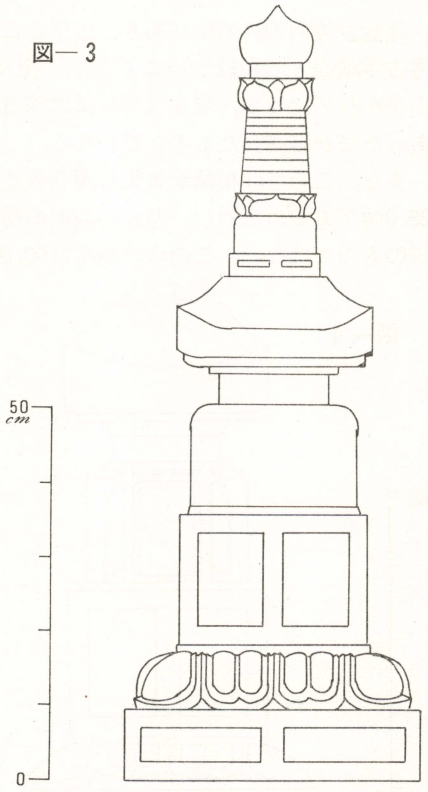
軸部は円筒で上部は粽形になる。扉の表現は行なわれず全面無地である。首部も低い円筒である。

○屋　蓋

（表3）各部分の寸法

部　分	寸　法（単位CM）
総　高	104.0
基　礎	全高18.0
側　面	高 9.5　横39.0
反　花	高 8.5　横下37.0　上25.5
基　台	全高18.5
側　面	高17.5　横25.0
受　座	高 1.0　径下22.5　上22.0
塔　身	全高17.5
軸　部	高13.5　径21.8
首　部	高 4.0　径14.5
屋　蓋	全高16.5
軒	中央厚 4.0　横26.0
露　盤	高 3.0　横12.0
軒裏椎	高 1.2　横23.5
円　座	高 0.8　横下17.0　上17.5
相　輪	全高33.0
伏　鉢	高 5.0　径11.2
下部請花	高 3.0　最大径11.0
九　輪	高11.0　径下9.5　上8.0
上部請花	高 4.5　最大径10.0
宝　珠	高 9.5　最大径 9.5

図―3



全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ちあがり，両隅が反りあがる。軒裏には各1段の棰と円座を造る。棰も軒と同様両隅で反りあがる。円座は上部が外傾した側面になる。

屋蓋の上部には露盤を造り，側面は輪郭と束によって一面を2区に分ける。

○相　輪

下の部分から伏鉢・請花・九輪・請花・宝珠によって構成される。

伏鉢は円筒で上部を粽形にする。

下部の請花は下から丸味をもってひろがり上部でわずかにくびれている。花弁は外側に4弁，内側に4弁の計8弁を彫刻する。

九輪は上部が細くなる円筒で，8本の刻線をめぐらして輪相を表現する。

上部の請花は下部の請花と同じ形で，45度回転させているため，下部で外側に花弁がある直上では，内側の花弁を彫出する。

宝珠はいわゆる擬宝珠形であるが，中間部は円筒に近くなり，頂部はとがっている。

○参考文献

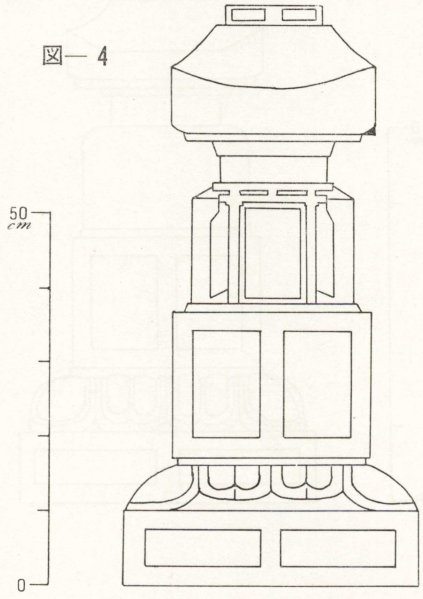
赤星　直忠　　箱根町塔の沢阿弥陀寺洞窟の石造塔婆　神奈川県文化財調査報告　第27集

4.　鎌倉市　鎌倉宮　応永15年在銘宝塔（1408年）〔図―4・写真―5〕

鎌倉宮境内の林の中にあり，近年ここに移されたもので，跡部直治氏の「宝塔」（仏教考古学講座・昭和11年）によると，全く同じ銘を持つ宝塔が横須賀市の大明寺にあることが書かれているが，現在大明寺には該当する塔が見当らないことから，この塔は大明寺にあった塔が移されたものと思われる。

また，この塔は相輪が欠失し現在自然石を置いている。基礎も反花上面の受座の横幅が25.0㎝であるのに対し，基台の側面の横幅が26.0㎝と大きく明らかに，基礎は本来のこの塔のものではない。この塔の現高は60.0㎝である。

図―4



（表4）各部分の寸法

部　　分	寸　法（単位CM）
総　　高	現高60.0（基礎をのぞく）
基　　台	全高20.5
側　　面	高19.5　横26.5
受　　座	高 1.0　径下23.5　上22.8
塔　　身	全高19.5
軸　　部	高16.0　径21.5
首　　部	高 3.5　径14.2
屋　　蓋	全高20.0
軒	中央厚 6.0　横27.0
露　　盤	高 2.5　横13.0
軒裏棰	高 1.0　横下23.0　上24.0
円　　座	高 2.0　径下15.0　上16.0

○基　台

方形の側面は輪郭と束によって一面を2区に分ける。区内には各2行ずつ「律師日賢」和尚也」応永十五年」八月十一日施主敬白」の銘を刻む。基台の上面には側面が傾斜した円形の低い受座を造り塔身をのせている。

○塔　身

軸部は円筒で上部は粽形にせず傾斜面をつけて首部に続けている。正面には鳥居形を浮彫りにした扉を造り，これを左右に開いた表現を柱の外側につけている。

首部は低い円筒である　。

○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ちあがり，軒の下部で両隅はわずかに反りあがる。軒裏には各1段の椎と円座を造り，両者とも上部が外傾した側面になる。椎は軒と異なり反りを持たない。

屋蓋の上部には露盤を造り，側面は輪郭と束によって一面を2区に分ける。

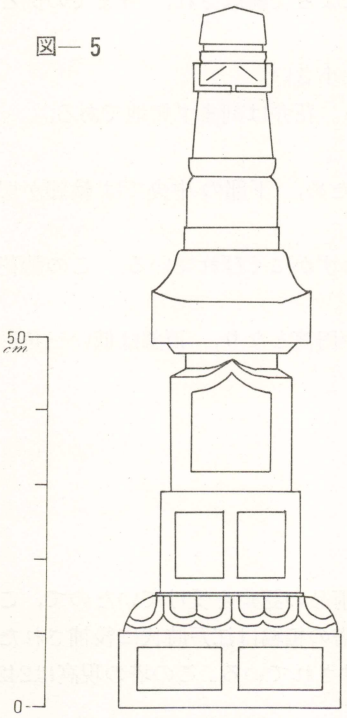
○参考文献

跡部　直治　　宝塔　仏教考古講座

5.　横浜市　豊顕寺　元亀3年在銘宝塔（1572年）〔図―5・写真―7〕

山門を入って左側の鐘楼の近くに，この寺の開基である多米一族の墓塔があり，前記の3基の宝塔と1基の無銘の宝篋印塔がある。3基の宝塔は記年銘の年代が近く，しかも，

図―5



（表5）各部分の寸法

部　分	寸　法（単位CM）
総　高	91.5
基　礎	全高15.5
側　面	高10.0　横29.5
反　花	高 5.5　横下28.5　上20.0
基台側面	高14.0　横18.5
塔　身	全高18.0
軸　部	高16.0　径16.0
首　部	高 2.0　径12.0
屋　蓋	全高15.0
軒	中央厚5.5　横21.0
露　盤	高 3.0　横12.5
軒裏円座	高 1.5　径下15.0　上17.0
相　輪	全高29.0
伏　鉢	高 6.5　径12.0
下部請花	高 2.5　最大径11.5
九　輪	高 8.5　径下11.0　上9.0
水　烟	高 3.5　横10.5
上部請花	高 2.0　最大径 9.0
宝　珠	高 6.0　最大径 9.0

ほとんど同じ形態であり，弘治3年在銘塔は相輪の上部に欠失する部分があるため，ここでは，この元亀3年在銘塔で代表させる。この塔の総高は91,5cmである。

○基　礎

下部は方形の側面で輪郭と束によって一面を2区に分ける。上部の反花は彎曲した面に刻線で表わした簡単な表現をとり，一面に複弁の反花を4弁刻むが，両端は左右の側面の花弁を兼ねるため，全体では12弁である。反花の上面には低い方形の受座を造る。

○基　台

方形の側面は基礎と同様輪郭と束によって一面を2区に分ける。上面に受座を造ることは省略されている。

○塔　身

軸部は円筒で上部を傾斜面にして首部に続けている。正面には上部を合掌形にした扉を造り，扉内には「元亀三年壬申」蓮秀覚位」十二月四日」の銘を刻む。

首部は低い円筒である。

○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ちあがり，軒下は水平となり反りをもたない。軒裏は棰を省略して造らず，上部が外傾する側面の円座1段のみになる。屋蓋の上部には露盤を造るが，側面は輪郭と束によって一面を2区に分けることを省略し，無地である。

○相　輪

下の部分から伏鉢・請花・九輪・水烟・請花・宝珠によって構成され，今までの例と異なることは，水烟が造られることである。

伏鉢は円筒形で上部を粽形にするが，ふくらみはやや小さい。

下部の請花は丸味をもって上に行くに従って広ろがる。花弁は刻まず無地である。

九輪は上部が細い円筒で，輪相は刻まず無地である。

水烟は方形の側面で，左右からL字形の輪郭をとるため，下部の中央では輪郭が切れる。区内にはハ字形の刻線を刻む。

上部の請花は下から丸味をもってひろがり，上部でわずかにくびれている。この請花も花弁は刻まず無地である。

宝珠は下部は円筒で一度水平にひろがり，上部が細い円筒となり，頂部は低い三角形になる。

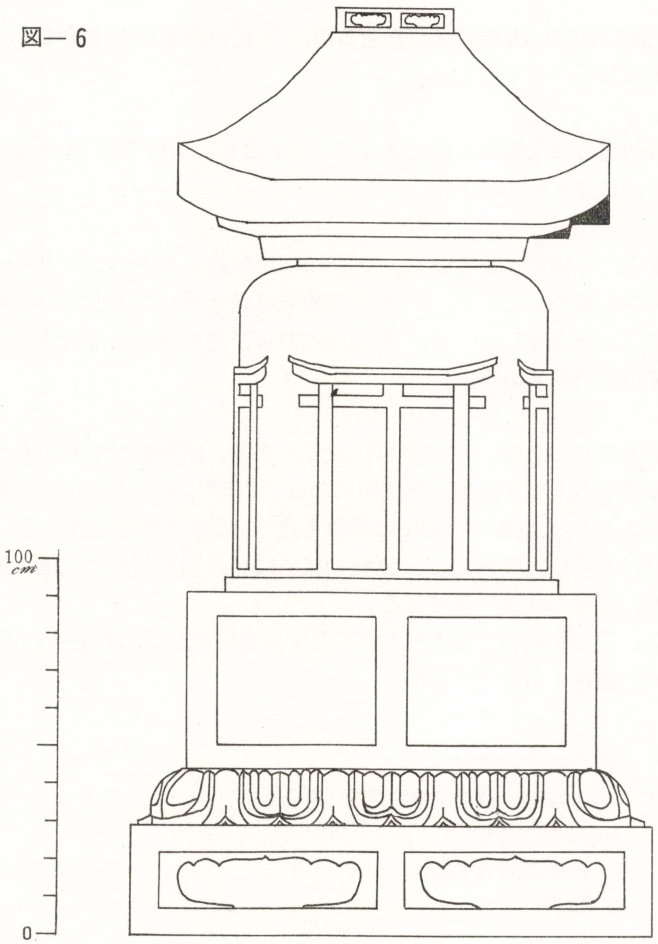
○参考文献

石田　茂作　　日本仏塔

6.　鎌倉市　別願寺　宝塔〔図—6・写真—1〕

寺域の左側にある墓地内に造立されていて，重要美術品の認定を受けていたので，これまで，多くの人により紹介され論じられて来た。この塔の相輪は江戸時代に後補されたものであるが，その他の部分は鎌倉時代の後期に位置付けされている。この塔の現高は242.0cmである。

図—6



○基　礎

下部は方形の側面で輪郭と束により一面を2区に分ける。区内には各々に格狭間を刻む。格狭間の形は下部両脇のふくらみが強く鎌倉時代後期の特色を示し，鈴木氏嘉暦2年塔よりも古い形である。上部の反花は複弁で一面に5弁を彫るが，両端の花弁は左右の側面のそれを兼ねるため，全体で16弁である。基礎の反花の弁数については，鎌倉時代後期には一定せず，南北朝時代になると一面4弁で全体では12弁に統一され，これが室町時代まで引き継がれることが五輪塔・宝篋印塔の研究により明らかにされている。この点でも別願寺塔は鈴木氏塔よりも古いことを示して

（表—6）各部分の寸法

部　分	寸　法（単位CM）
総　高	現高242.0(相輪をのぞく)
基　礎	全高43.5
側　面	高29.0　横139.0
反　花	高14.5 横下135.0 下111.0
基　台	全高51.0
側　面	高47.0　横108.0
受　座	高 4.0　径 88.0
塔　身	全高82.0
軸　部	高80.0　径84.0
首　部	高 2.0　径52.0
屋　蓋	全高65.5
軒	中央厚11.0　横114.0
露　盤	高6.0　横31.0
軒裏垂上段	高3.5　横下91.0　上93.5
下　段	高6.0　横下69.0　上71.0

いる。反花の上面には低い方形の受座を造るが，反花の表現が立体的で上部にふくらみを持つため，受座は反花にうまっている。

○基　台

方形の側面は基礎と同様輪郭と束によって一面を２区に分ける。基台の上面には円形の低い受座を造り，塔身をおいている。

○塔　身

軸部は円筒で上部を粽形にしている。下部には地長押を巻き，この上には四方に鳥居形を浮彫りにして扉を表わしている。鳥居形の額束は貫を通って下方にのび地長押まで続き扉が閉じていることを表現している。貫と島木および笠木は両端で反りあがっている。

首部は非常に短い円筒である。

○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ちあがり，両隅が反りあがる。軒裏には２段の棰を造る。２段とも上部が外傾した側面になる。下段の棰は水平であるが，上段は軒と同様両隅が反りあがる。屋蓋の上部には露盤を造り，側面を輪郭と束によって一面を２区に分け，区内には各々格狭間を刻む。露盤の区内に格狭間を刻むことは，鎌倉時代後期の宝篋印塔の露盤にも見られる特色である。

以上のように，この別願寺宝塔は形態から見て鎌倉時代後期の造立で，鈴木氏嘉暦２年在銘塔よりも古い特色を示す部分がある。

○参考文献

赤星　直忠　　鎌倉市史　考古編
安田　三郎　　鎌倉の石塔　鎌倉国宝館図録　第十集
川勝政太郎　　日本石材工芸史
跡部　直治　　宝塔　仏教考古学講座
石田　茂作　　日本仏塔

7.　横須賀市　大明寺　宝塔〔図―７・写真―６〕

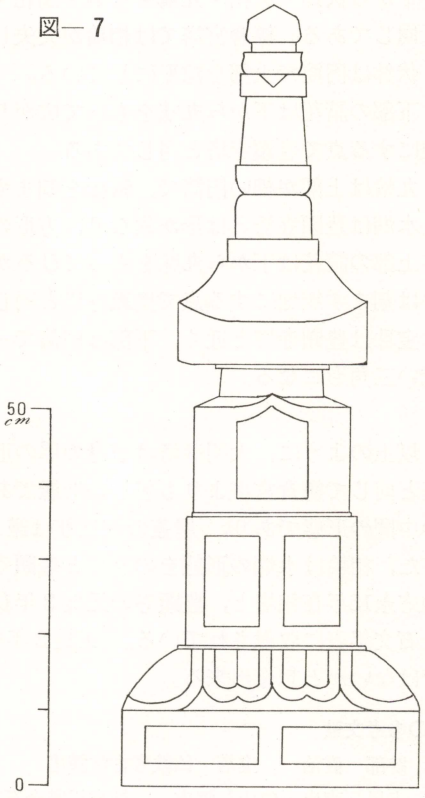
寺域の裏山から墓地の造成工事の際に出土したもので，現在，多くの石塔断石が一ケ所に集められ，その中にこの１基が組み立てられている。基礎は上面の受座の横が25.0㎝であるのに対し，基台の側面の横が22.5㎝と差があり過ぎるため，別の塔のものと考えられまた，所在の条件からその他の部分についても同一塔のものかどうか疑問が残るが，大きさとしては問題はなく，各部分の特徴は，後で著しく述べるが，鎌倉宮応永15年在銘塔と豊顕寺元亀３年在銘塔との中間を示すと考えられる形態であることから，ここに紹介する。

また，大明寺にある宝塔については，跡部直治氏が「宝塔」（仏教考古学講座）で応永15年在銘塔があることを記し，赤星直忠・中山毎吉の両氏が作成した「神奈川県金石文年表」（考古学雑誌28―11）には，応永10年８月11日・正長２年８月７日・長禄２年７月３日の銘が刻まれている宝塔（基台）があることを収録しているが，応永15年塔は現在鎌倉宮に移されたと考えられ，現在残る宝塔の銘文は磨滅して読むことが出来ないが，金石年表に収録されているものの１基と考えられる。この塔の現高は84.5㎝である。

（表—7）各部分の寸法

部　分	寸　法（単位CM）
総　高	現高84.5（基礎をのぞく）
基　台	全高17.5
側　面	高17.0　横22.5
受　座	高 0.5　径21.0
塔　身	全高19.0
軸　部	高16.0　径20.5
首　部	高 3.0　径下14.0　上13.5
屋　蓋	全高17.0
軒	中央厚5.5　横25.0
露　盤	高 3.0　横12.0
軒裏円座	高 0.5　径15.0
相　輪	全高31.0
伏　鉢	高 6.0　径10.0
下部請花	高 4.0　最大径10.0
九　輪	高 9.0　径下8.5　上7.5
水　烟	高 3.0　横8.5
上部請花	高 3.0　最大径8.0
宝　珠	高 6.0　最大径7.5

図—7



○基　台

側面を輪郭と束によって一面2区に分けることはすべての塔と同じであるが，上面の受座は非常に低い円形となり，豊顕寺塔では受座を造らなくなるが，その過程を示すものである。区内には銘を刻んだ痕跡があるが，現在は前述のように磨滅して読めない。

○塔　身

軸部は円筒で上部を傾斜面としていることは鎌倉宮塔・豊顕寺塔と同じである。正面の扉は上部を合掌形にする点で豊顕寺塔と同じである。扉内には「南無多宝如来」南無妙法蓮華経」南無釈迦如来」と三行を刻む。

首部は円筒であるが，上部がやや細くなっていることは，今までの塔と異なる形態である。

○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は垂直に立ち上がり，軒下では両隅がわずかに反りあがり鎌倉宮塔と同じである。軒裏は棰は造らず円座を1段造る点で豊顕寺塔と同じである。鎌倉宮塔では棰を造る。露盤は側面を鎌倉宮塔では2区に分けるのに対し，無地であり豊顕寺塔と同じである。

○相　輪

下から伏鉢・請花・九輪・水烟・請花・宝珠の各部分によって構成される点で豊顕寺塔と同じである。鎌倉宮塔では相輪が欠失しているため比較は出来ない。

伏鉢は円筒で上部を粽形にしている。

下部の請花は下から丸味をもって広がり，上部は垂直にあがっている。花弁は刻まず無地にする点で豊顕寺塔と同じである。

九輪は上部が細い円筒で，輪相を刻まず無地にする点で豊顕寺塔と同じである。

水烟は豊顕寺塔とは形が異なり，方形の側面にV字形を彫り込んでいる。

上部の請花は下から丸味をもってひろがり上部でわずかにくびれている。この請花も花弁は刻まず無地にする点で豊顕寺塔と同じである。

宝珠は豊顕寺塔と近く，下部は円筒で一度太くなり上部がやや細い円筒となり，頂部は低い三角形になる。

以上のように，大明寺塔は塔身の扉の形，屋蓋の軒裏の形，屋蓋の露盤の形では豊顕寺塔と同じで鎌倉宮塔よりも新しい形態であり，基台の上面の受座は鎌倉宮塔と豊顕寺塔との中間の形態であり，屋蓋の軒反りは鎌倉宮塔と同じで豊顕寺塔よりも古い形態である。また，相輪は水烟の形態をのぞくと豊顕寺塔と同じである。そこで，大明寺塔は，鎌倉宮の応永15年在銘塔と，豊顕寺の元亀３年在銘塔との間に造立されたと考えられ，神奈川県金石文年表に収録されている。正長２年在銘塔もしくは長禄２年在銘塔のいずれかの１基ではないかと想像出来る。

○参考文献
跡部　直治　　宝塔　仏教考古学講座
赤星　直忠・中山　毎吉　　神奈川県金石文年表　考古学雑誌28—11

8.　厚木市　妙純寺　宝塔〔図—８・写真—８〕

本堂の前方右側の墓地の中にある。この塔は無銘であるが，細部において豊顕寺元亀３年在銘塔よりも新しいと考えられる部分があるためここに紹介する。この塔の総高は99.5 *cm*である。

○基　礎

下部は方形の側面で輪郭と束によって一面を２区に分ける。上部の反花は彎曲した面に刻線で表わすが，豊顕寺塔の反花と比較すると直線的になり非常に形式的な形態を示し，全体で12弁の複弁を刻る。反花の上面には低い方形の受座を造る。

○基　台

方形の側面は基礎と同様輪郭と束によって一面を２区に分ける。上面に受座を造らないことは豊顕寺塔と同じである。

○塔　身

軸部は円筒で上部を傾斜面にして首部に続ける。正面には上部を合掌形にした扉を造る。この点で豊顕寺塔と同じ形態である。首部は低い円筒であるが上がやや細い。

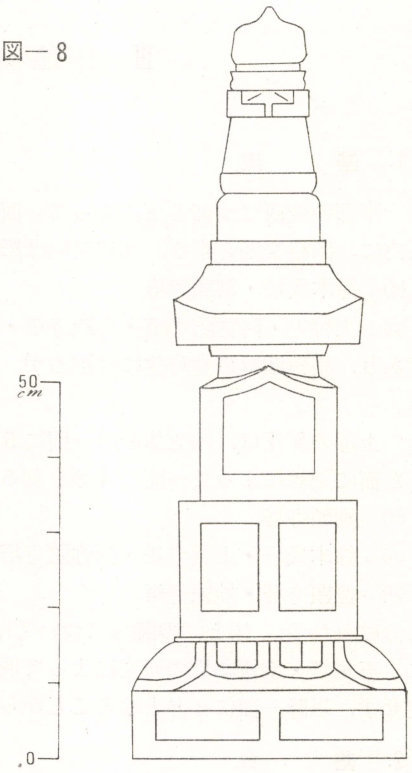
○屋　蓋

全体の形は宝形造りである。軒は上部にやや外傾する点で今までの塔では例を見ない。

付（表—8）各部分の寸法

部　分	寸　法（単位CM）
総　高	99.5
基　礎	全高16.0
側　面	高 9.0　横36.5
反　花	高 7.0　横上25.5
基台側面	高18.0　横23.5
塔　身	全高19.5
軸　部	高16.5　径18.0
首　部	高 3.0　径下13.5　上13.0
屋　蓋	全高15.0
軒	中央厚4.0 横下24.0 上25.0
露　盤	高 3.0　横15.0
軒裏円座	高 1.5　径下15.0　上17.0
相　輪	全高31.0
伏　鉢	高 6.5　径13.5
下部請花	高 2.5　最大径12.5
九　輪	高 7.5　径下12.0　上10.0
水　烟	高 3.5　横11.0
上部請花	高 2.5　最大径10.0
宝　珠	高 8.5　最大径10.0

図—8



新しい形態と考えられる。軒下は水平で豊顕寺塔と同じである。軒裏は垂は造らず，上部が外傾する側面の円座1段のみで，これも豊顕寺塔と同じである。露盤も豊顕寺塔と同様に側面を無地にしている。

○相　輪

下の部分から伏鉢・請花・九輪・水烟・請花・宝珠によって構成され，宝珠の頂部の形が異なる以外は豊顕寺塔の各部分と同じ形態である。すなわち，

伏鉢は円筒で上部を粽形にするが，その丸味は小さい。

下部の請花は下から丸味をもってひろがり，花弁は刻まず無地である。

九輪は上部がやや細い円筒で，輪相は刻まず無地である。

水烟は方形の側面で，左右からL字形の輪郭をとり，区内にはハ字形の刻線を刻む。

上部の請花は下から丸味をもってひろがり上部でわずかにくびれる。この請花も無地である。

宝珠は下部は円筒で一度ひろがり，上部は上が細い円筒で，頂部はまるめられている。

以上のように，この塔は，反花の形態，軒の外傾，宝珠の頂部の形から，豊顕寺の元亀3年在銘塔よりも年代が新しい塔と考えられる。

Ⅲ 形態の相違と時代相

1. 基　　礎

a　下部の側面は輪郭と束によって一面を2区に分けることではすべての塔で共通するが区内に，(イ)格狭間を彫る。(ロ)格狭間は彫らない。の2種がある。

(イ)　鈴木氏塔・別願寺塔

(ロ)　上行寺・阿弥陀寺塔・豊顕寺塔・妙純寺塔

であり，格狭間は鎌倉時代には彫るが，以降では省略され彫られなくなることを示している。

b　上部の反花は，(イ)立体的に一面に5弁を彫る。(ロ)立体的に一面に4弁を彫る。(ハ)彎曲した面に刻線によって一面に4弁を刻る。の3種があり，

(イ)　別願寺塔

(ロ)　鈴木氏塔・上行寺塔・阿弥陀寺塔

(ハ)　豊顕寺塔・妙純寺塔

に分けられる。(イ)と(ロ)の関係については，前に別願寺塔のところ（Ⅱ－6）で記したように，五輪塔・宝篋印塔の研究によって明らかにされているように，鎌倉時代には弁数が一定せず，以降一面に4弁となることから，(イ)→(ロ)→(ハ)と変化したことを示している。

2. 基　　台

側面は輪郭と束によって一面を2区に分けることはすべての塔で同じであるが，基台の上面に，(イ)円形の受座を造る。(ロ)受座を造らない。の2種があり，

(イ)　鈴木氏塔・上行寺塔・阿弥陀寺塔・鎌倉宮塔・別願寺塔・大明寺塔

(ロ)　豊顕寺塔・妙純寺塔

に分かれ，(イ)→(ロ)と変化したことを示している。

3. 塔　　身

a　軸部の扉の表現については，(イ)鳥居形を四方に表わす。(ロ)柱によって4区に分ける。(ハ)無地にして扉を表わさない。(ニ)鳥居形を正面に表わす。(ホ)上部を合掌形にして正面に表わす。の5種があり，

(イ)　別願寺塔

(ロ)　鈴木氏塔

(ハ)　阿弥陀寺塔

(ニ)　鎌倉宮塔

(ホ)　豊顕寺塔・大明寺塔・妙純寺塔

に分かれ，はじめは様々な表現であったものが，後に上部を合掌形にして正面にだけ表わすように統一されたことがわかる。また，鎌倉時代には四方に表わしたものが，後には正面にだけ表わすようになったことを示している。

b　軸部の肩は，(イ)粽形にする。(ロ)傾斜面にする。の2種があり，

(イ)　鈴木氏塔・阿弥陀寺塔・別願寺塔
(ロ)　鎌倉宮塔・豊顕寺塔・大明寺塔・妙純寺塔
に分かれ，(イ)→(ロ)と変化したことを示している。
c　首部はすべての塔で低い円筒であるが，(イ)束によって4区に分ける。(ロ)無地で垂直である。(ハ)無地で上部がやや細い。の3種があり，
(イ)　鈴木氏塔
(ロ)　阿弥陀寺塔・鎌倉宮塔・豊顕寺塔・別願寺塔
(ハ)　大明寺塔・妙純寺塔
に分かれ，(イ)→(ロ)→(ハ)と変化して来た傾向を示している。

4. 屋　　蓋

a　軒については，(イ)垂直に立ちあがり軒下で反りあがる。(ロ)垂直に立ちあがり軒下の反りはわずかである。(ハ)垂直に立ちあがり軒下に反りがない。(ニ)上部が外傾し軒下に反りがない。の4種があり，
(イ)　鈴木氏塔・上行寺塔・別願寺塔
(ロ)　阿弥陀寺塔・鎌倉宮塔・大明寺塔
(ハ)　豊顕寺塔
(ニ)　妙純寺塔
に分かれ，(イ)→(ロ)→(ハ)→(ニ)と変化したことを示している。
b　軒裏は，(イ)2段の棰を造る。(ロ)棰と円座を各1段造る。(ハ)棰は造らず円座を1段造る。の3種があり，
(イ)　別願寺塔
(ロ)　鈴木氏塔・上行寺塔・阿弥陀寺塔・鎌倉宮塔
(ハ)　豊顕寺塔・大明寺塔・妙純寺塔
に分かれ，(イ)→(ロ)→(ハ)と変化したことを示している。また，棰の反りについても，軒の反りと同様次第に反りが小さくなる傾向を示し，鎌倉宮塔では反りを持たなくなる。
c　露盤は，(イ)側面を2区に分け区内に格狭間を彫る。(ロ)側面を2区に分ける。(ハ)側面を無地にする。の3種があり，
(イ)　別願寺塔
(ロ)　鈴木氏塔・上行寺塔・阿弥陀寺塔・鎌倉宮塔
(ハ)　豊顕寺塔・大明寺塔・妙純寺塔
に分かれ，(イ)→(ロ)→(ハ)と変化したことを示している。

5. 相　　輪

a　請花は，(イ)花弁を彫る。(ロ)無地にする。の2種があり，
(イ)　鈴木氏塔・阿弥陀寺塔
(ロ)　豊顕寺塔・大明寺塔・妙純寺塔
に分かれ，(イ)→(ロ)と変化したことを示している。

b　九輪も，(イ)輪相を刻る。(ロ)無地にする。の２種があり，

(イ)　鈴木氏塔・阿弥陀寺塔

(ロ)　豊顕寺塔・大明寺塔・妙純寺塔

に分かれ，(イ)→(ロ)と変化したことを示している。

九輪および請花を無地にすることについては，赤星直忠氏が鎌倉市史考古編に長谷寺出土相輪として，室町初期の宝篋印塔の相輪に，輪相と蓮弁を刻まず金泥で線描している例をあげている。宝塔の相輪もこれが行なわれていたため，現状では金泥が落ちて無地になったと考えられる。

c　水烟については，(イ)水烟を造らない。(ロ)方形の側面にＶ字形を刻む水烟を作る。(ハ)側面にＬ字形の輪郭をとり，区内にハ字形の刻線を入れる。の３種があり，

(イ)　鈴木氏塔・阿弥陀寺塔

(ロ)　大明寺塔

(ハ)　豊顕寺塔・妙純寺塔

に分かれる。水烟の形態２種(ロ)・(ハ)について，前に大明寺塔のところ（Ⅱ－７）で記したように，大明寺塔が各部分の形態を総合して考えると，鎌倉宮塔と豊顕寺塔の間に位置すると考えられるため，大明寺塔の形態(ロ)が古いと考えられ，(イ)→(ロ)→(ハ)と変化したと想像出来る。

b　宝珠は，(イ)いわゆる擬宝珠形。(ロ)上部が細い円筒で頂部が三角形。(ハ)上部が細い円筒で頂部を丸める。の３種があり，

(イ)　鈴木氏塔・阿弥陀寺塔

(ロ)　豊顕寺塔・大明寺塔

(ハ)　妙純寺塔

に分かれ，(イ)→(ロ)→(ハ)と変化したと考えられる。

Ⅳ　各　部　分　の　比　率

今回紹介した８基の宝塔の造立の順は，古い塔から，1. 別願寺塔　2. 鈴木氏塔　3. 上行寺塔　4. 阿弥陀寺塔　5. 鎌倉宮塔　6. 大明寺塔　7. 豊顕寺塔　8. 妙純寺塔　となることは今までに記したことから推定出来る。この８基に，豊顕寺にある弘治３年在銘塔および天正５年在銘塔の２基を加え，各部分の比率を算出すると次の通りになる。（表－９）

1.　基礎の側面横に対する基礎の全高の比は，年代が降るに従って高さを増す傾向を示してはいるが，鈴木氏塔よりも上行寺塔の比が小さく，また，妙純寺塔の比が小さいなど，それほど正確には現われていない。

2.　基礎の側面横に対する反花の高さの比は，鎌倉時代から南北朝時代にかけて，次第に高さを増し，反花が刻線によって現わされる時期になると，また低くなるが比率はくずれる傾向を示している。

3.　基台の側面横に対する基台の全高の比は，年代が降るに従って高さが増す傾向を示し

（表－9）　各塔の各部分の比率（%）

	別願寺	鈴木氏	上行寺	阿弥陀寺	鎌倉宮	大明寺	豊顕寺	豊顕寺	豊顕寺	妙純寺
		嘉暦2 1327	文和2 1353	至徳4 1387	応永15 1408		弘治3 1557	元亀3 1572	天正5 1577	
1. 基礎の側面横に対する基礎の全高の比	31	44	41	46	—	—	50	53	57	44
2. 基礎の側面横に対する反花の高さの比	10	16	16	19	—	—	15	17	15	13
3. 基台の側面横に対する基台の全高の比	47	58	72	74	79	78	58	76	83	77
4. 塔身の軸部径に対する塔身の全高の比	98	96	—	80	91	93	115	112	119	108
5. 屋蓋の軒下横に対する屋蓋の全高の比	58	66	69	62	74	68	60	71	70	62
6. 屋蓋の軒下横に対する露盤の横の比	27	34	36	46	48	48	55	60	60	63
7. 相輪の伏鉢径に対する相輪の全高の比	—	319	—	295	—	310	—	242	245	230
8. 九輪の下径に対する九輪の高さの比	—	188	—	116	—	106	81	77	65	63
9. 塔高に対する相輪高の比	—	35	—	39	—	37	—	38	36	37

ているが，年代の近い豊顕寺塔3基でも差が大きいため，あくまでも傾向を示すだけである。

4. 塔身の軸部径に対する塔身の全高の比は，年代の古い塔では径よりも高さが小さく，新しい塔では径よりも高さが大きいことを示している。すなわち，年代が降るに従って高さが増す傾向を示している。

5. 屋蓋の軒下横に対する屋蓋の全高の比は，ばらばらになり年代とともに変化する傾向は示さない。

6. 屋蓋の軒下横に対する露盤の横の比は，年代が降るに従って露盤の横が大きくなる傾向を示している。このことは，露盤の上にくる相輪の太さが増すことを示すものである。

7. 相輪の伏鉢径に対する相輪の全高の比は，年代が降るに従って太さが増す傾向は示しているが，正確には現われていない。

8. 九輪の下部径に対する九輪の高さの比は，年代が降るに従って九輪の高さが短くなる傾向を示している。

9. 塔高に対する相輪高の比は，赤星直忠氏が鎌倉市史考古編で宝篋印塔について算出し，年代が降るに従って宝篋印塔の相輪は長くなる傾向を示すことを明らかにしているが

宝塔については，南北朝時代まではこの傾向を示すが，室町時代になると逆にまた短くなる傾向を示している。

V　ま　と　め

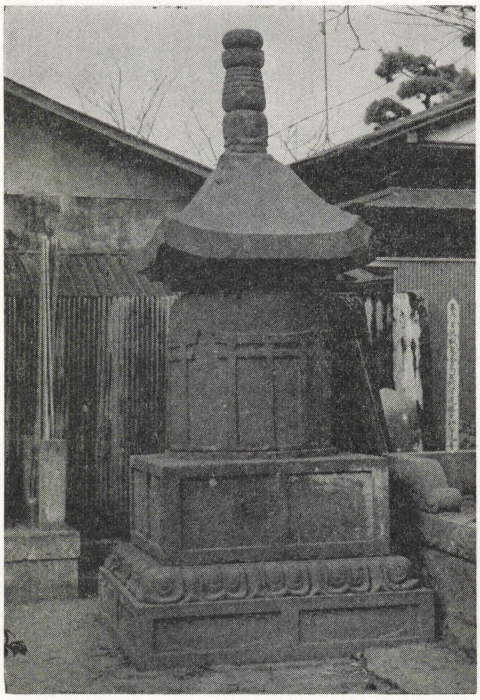
神奈川県下に残る石造宝塔は，はじめに述べた通りその遺例は少なく，しかも完全にそろっている塔で銘文から造立年代の明らかな塔は非常に少ない。また，比率についても，（表—9）のうち，6. の屋蓋の軒下横に対する露盤横の比，および，8. の九輪の下部径に対する九輪高の比において比較的正確に変化する傾向を示しているが，これについても，同じ年に造られた塔が発見された場合，同一の比率を示すとは思わない。ある程度の誤差は生じると考える。しかし，こららの比率と前に述べた各部分の形態の変化を総合することによって，造立時期を推定することは，15・16世紀の遺例が2，3基加わることによって可能になると思う。

最後に，川勝政太郎氏は日本石材工芸史において，鎌倉時代後期に関東形式の宝篋印塔が成立したことを明らかにし，関東形式の特色をあげている。そこで，この関東形式の宝篋印塔と今回取り上げた8基の宝塔との共通点をあげると，

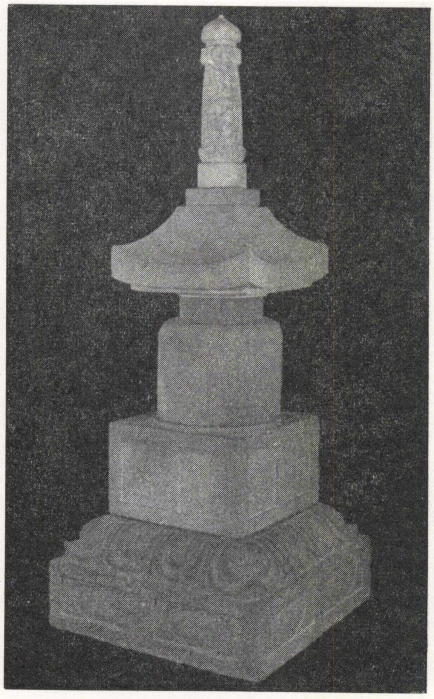
1.　基礎はすべての塔にあり，上部を反花にする。ただし，鎌倉宮塔と大明寺塔では現在は別の塔の基礎の上に立っている。
2.　基礎と基台および露盤の側面は，輪郭と束によって一面を2区に分ける。ただし，露盤については，年代の新しい塔ではこれが省略される。
3.　屋蓋の上部にはかならず露盤を造る。

などの点があげられ，これをもって，関東形式の宝塔の特色と言うことが出来る。

〔追記〕　この稿を書くにあたり，赤星直忠氏に全般的なご指導をいただきましたことを感謝する次第です。



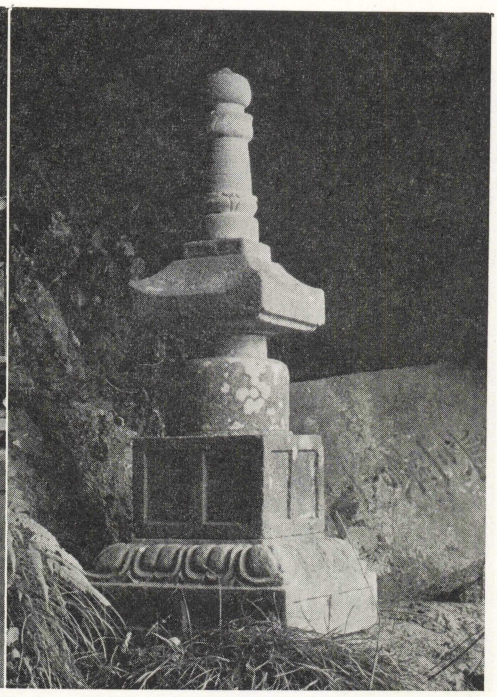
1.　別願寺宝塔



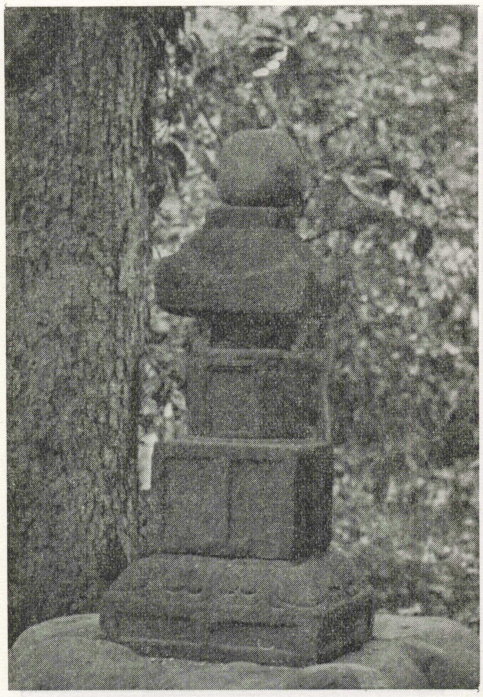
2.　鈴木氏　嘉暦2年在銘宝塔



3.　上行寺　文和2年在銘宝塔



4.　阿弥陀寺　至徳4年在銘宝塔



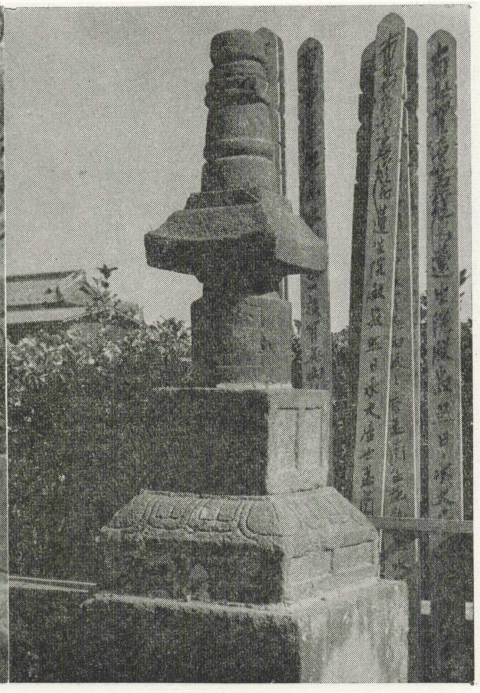
5. 鎌倉宮 応永15年在銘宝塔



6. 大明寺 宝 塔



7. 豊顕寺 元亀3年在銘宝塔



8. 妙純寺 宝 塔